

2023年3月19日 半田朝礼拝

午前 10時30分

司会 山田紀子

奏楽 永井 花

前 奏

招 詞

ローマの信徒への手紙 第12章1節

讃美歌

讃美歌 21-3-1 (扉を開きて)

交 読

詩編第10篇 (讃美歌 21 p. 12)

祈 禱

聖 書

イザヤ書 第45章6-7節 (旧約 p. 1135)

マルコによる福音書 第10章27節

(新約 p. 82)

讃美歌

讃美歌 21-300-1 (十字架のもとに)

説 教

「全能の神とは」

使徒信条は、神を全能の父と呼んでいます。神さまは全能の方だと言います。この<全能>という言葉は、明らかに主イエス・キリストの父なる神の力をほめたたえている。すべての力

に勝る力を持っておられるということをほめたたえています。

言い換えれば、この父なる神にとっては、どんなこともできるのだということです。神が神であられる以上、どんなこともおできになるというのは当たり前ではないか。何かできないことのある神、そういう神を考えること自体おかしいではないか。

そういう神は神の名に値するのか。そう問うこともできます。

そう言えば言えます。そして、そういう観点からすれば、神の全能について、あれこれとやかく言うこと自体おかしいということになるかもしれません。けれど、信仰の歴史を振り返ってみると「神は全能の方であられる」ということは決して容易なことではありませんでした。特に、この使徒信条の表現でとても大事なことは「全能の神」と言わないで、「全能の父」と記していることです。

聖書を見ると、「全能の父」という言葉は出てきません。

神を「全能の父なる神」と呼んでいることはないのです。それならば、使徒信条を作った教会は越権行為をしたのか。聖書に

書いていないことを自分たちで言い始めたのか。そうではなくて、聖書が語り、そして自分たちもまた捕らえられたその神の力を、これは父としての全能の力であるとしか言いようがなかったのです。このことは、わたしたちも記憶すべきことで、そういうことから言えば、神が父なる方であられるということと、全能の方であられるという、この二つのことを切り離さないで、一つのこととして考えることが正しいのではないかと思います。

わたしたちが洗礼を受けるとき、使徒信条を唱和しますが、今日のところで言えば、洗礼を受ける、信仰が与えられるということは、「神がこのわたしにとって全能の父であられる」、「父としての全能を表してくださった」ということを承認する、認めるということです。それは、今日のイエスさまのお言葉で言えば、「人にできることではないが、神にはできる。神は何でもできる」ことを承認するということです。イエスさまは弟子たちを見つめながら、そうおっしゃったのです。イエス

さまはいつでも言葉を語られる時に、語る相手をじっと見つめてお話になったのに違いありませんけれど、この福音書は、特にこのみ言葉を主イエスは弟子たちを見つめながらお語りになったのだと。イエスさまの特別なみ心を、そこに示しています。「人にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ」。

イエスさまはこうしたことを、ここだけで話しておられるわけではありません。例えば同じマルコによる福音書第9章は、14節以下で、霊に捕らえられてしばしば引きつけを起こす子どもを持った父親のことを書きました。そして、その父親に対してもイエスさまは言われました。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる」(9:23)。このみ言葉と、先ほどの「神はどんなことでもできる」と言われたみ言葉と、ほとんど同じ意味ですし、第10章の方の言葉をもう少し正確に言いますと「神はどんなことでもできる」というよりも「神の傍らにあっては何でも可能だ」ということです。あるいは「神の傍らに

はすべてのことをする力がある」ということです。

信仰というのは、この神の傍らに立つことです。そしてその神のすべてをなし得る力を信じ切るということです。しかもこの神のすべてをなし得る力というのは、自分のための力だということをはっきりわきまえるということです。少し大胆な表現をすると、神が父として全能であられるということを問うということは、自分の信仰が神の傍らにあって、すべてのことをなし得る信仰になる、そのことをはっきりわきまえるようになるということです。大胆にと言いましたが、大胆でも何でもないのでかもしれません。イエスさまは「**信じる者には何でもできる**」と言われます。わたしたちにそう言われます。わたしたち一人一人に「あなたは信仰を持つか、そうしたら、あなたにとってすべてのことは可能になるではないか」と言われるのです。「全能の神とは」という説教の題を掲げました。これは、神さまに向かって「あなたは何でもおできになるそうですが、それは本当ですか」というような、のんきな問いを出すことでは

ありませんし、まるでわたしたちが神さまの試験官になったかのように「なんでもおできになるのなら、ひとつやってみてください」と言ってみせることが、神の全能をわきまえるということではないからです。そうではなくて「信じる者には何でもできる」とおっしゃったイエスさまのみ言葉と、「神は何でもできる」とおっしゃったイエスさまのみ言葉と、二つの言葉を一つに併せて聞き取る。そのために「神よ、あなたが父として全能であられるということはどういうことですかと問います。あるいはまた「そのあなたの父としての全能を信じて生きるわたしたちの生き方は、いったいどのようなものなのでしょうか」と問うことでもあります。それはいったいどういうことなのでしょうか。

それはこういうことでもあるだろうと思います。わたしたちは昨年2月24日から始まったロシアによるウクライナ侵攻が一年経ったことを知っています。そして今年2月6日に発生したシリア・トルコ地震があります。もちろん、わたした

ちの身近なところでもさまざまな出来事が起こっています。そうしたときに、神がわたしたちの神であると言うのであれば、わたしたちの支配者であると言うのであれば、わたしたちの恵みの支配者であると言うのであれば、どうしてこの世界にこのような悲劇をわたしに強いるのか。神が全能であられるということは、どんなことでもなし得る方であるということは、何事でも支配し、その手の内に納めておられるということは、いったい、わたしにこのような不幸を求めるということを意味するのですかということです。

先ほど、＜全能＞ということと＜父＞であられるということが一つになって問われると言いましたが、そこではっきりと浮かび上がってくるのは、こういう問いです。ただ、おかしい言い方ですが、神が父ではあられないけれども全能な方であられる、どんなことでもなし得る。悪いことでも災いでもどんな事でも呼び起こし得る方であるとするならば、それはやはりおかしい言い方ですが、それはそれなりに分かる。そういう冷

酷無慈悲な神だから、こういう災いをわたしになし得る。それは分かる。けれど、この神がわたしにとって父であられるという事は、そこでは少しも見えてこないではないか。そういう考え方もできるだろうと思います。けれど言うまでもないことですが、そういう神はまことの神ではありません。ただ冷酷な、人間を勝手に弄ぶ支配者でしかないからです。気まぐれな神さまでしかないのです。そして、実際に多くの人たちは、神というものがあるとすれば、まことに気まぐれなものでしかないと思い悩んで生きてきたでしょうし、またその思いの中で死んでいったのではないか。こういう気まぐれな神が、力まかせに、本当に気まぐれに、ただこっちには幸運を、あっちには不運をばらまくだけであるとすれば、こちらは所詮かなわないではないか。何とかしてそんな神さまのご機嫌を取るか、でも、それもかなわないと思えば諦めるしかない。あるいはできるだけその神の意思を先取りして、逆らわないで済ませるようにした方が良く。この根底にあるのは、諦めであり、絶望でしかない。そういう神さまであれば本当は知らない方が良かったとい

うことになりかねない。

あるいはまた、逆に、神は父であられるけれども全能ではないとすれば、つまりまことに好意には満ちておられるけれども無力であるとするれば、これもおかしい事ですが、それなりに納得がいきます。こんな不幸を与えることを神さまはなさらない。こんな災いは神さまがもたらしたことではないのだ。けれど、神は、この世のこのような災い、このような悲しみに対しては、神さまご自身無力であることを示しておられるのだ。こういう神さまには同情はできるかもしれないが、そこに信仰が成り立つかというとなり立たないではないか。そこにあるのも諦めであり、結局は絶望しか残らない。けれど、神が全能の父であられるということをわたしたちが言い切るということは、そういう絶望に逆らって、わたしたちの望みを言い表すことです。

ただそう言いながらも、やはりここに一つの問いが残り

ます。それは、神さま、あなたが父であられて、しかもなお全能であられるとすれば、どうして自分が、自分たちの家族が、自分たちの国が、どうして訳が分からないこの苦しみの中に立ち続けなければならないのか、ということです。先ほど詩編第10篇をご一緒に交読いたしました。「主よ、なぜ遠く離れて立ち 苦難の時に隠れておられるのか」「心に思う 『神はわたしをお忘れになった。御顔を隠し、永久に顧みて下さらない』と」。詩編の至るところに、同じ問いが何度も繰り返されます。主よ、どうして遠くに離れて立っておられるのか。どうして、悩みの時に、こともあろうに、この時に、あなたはわたしを見捨てて姿を隠すのか。いったいいつまでなのですか。あなたはわたしを永久にお忘れになったのか。こういう言葉に満ちています。そして、第22篇に至ります。「わたしの神よ、わたしの神よ なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず 呻きも言葉も聞いてくださらないのか」。これは言うまでもなく、主イエスが十字架につけられた時に、叫ばれた言葉です。ここに至ってわたしたちはあっと思います。

気づきます。旧約聖書の詩編と、わたしたちの嘆きとが、ふたつ重なって揺さぶられる時に、この世界に、わたしたちのところに主イエスはお生まれになったのではないか。そして他の誰よりも深い思いで、主イエスはこの叫びを、ご自身の父なる神に向かってあげておられるのではないか。

主イエスは神のひとり子であるから、だから、特別な苦しみを苦しんでおられるというのではないのです。父なる神の全能を問いながら、その全能が分からなくなってしまう人々のすべての苦しみと一つになりながら、なぜ、わたしを、わたしたちを捨てられるのかと、主イエスは嘆かれるのです。いま受難節、レントの季節を過ごすわたしたちにとって、このわたしたちの悲しみと嘆きを一つにしながら、神の全能を問うイエス・キリストのみ苦しみを思う時です。

神の父としての全能を問う問いに対していろいろと書かれたものがあります。一つの代表的な言葉を紹介しますと、こ

うということです。「雨もひでりも、実り豊かな年も実らぬ年も・・・、健康も病気も、富も貧しさも、すべてのものが偶然からではなく、父としてのみ手によって、われわれに、来る、ということ」それを信じるのが全能の父を信じることだと言いつけています。

この言葉を読み返しながら、自分自身が日常生活の中で、実にしばしば間違いを犯していることに気がつきました。全能の父として神を信じるということは、簡単に言ってしまうと、神の好意を信じるということです。神の善き心を信じるということです。けれど、ここで問われるのは、いったいわたしたちは自分にとっての神の善き心をどこに見つけるのかということです。先ほど紹介しました言葉は、はっきり言います。

「雨もひでりも、実り豊かな年も実らぬ年も、・・・健康も病気も、富も貧しさも」です。幸せなことばかり探し出して、自分にはこんな幸せが与えられているから、神さまは好意ある方だ、一年を振りかえった時に、自分は健康だったし、貧しくも

なかったし、とにかく家族も皆、お腹一杯食べることができたから幸せだったし、だから神さまの好意はまだ変わらないのだというような考え方を、わたしたちはしばしばするのです。そのようにしか感謝しない。神の好意のしるしを、自分にとって幸せだと見えることにしか見出そうとしない。けれど、この信仰問答ははっきり言います。病気の中にも神の好意はある。自分が病気になるというそのことの中で、神は全能の父であられるということを、わたしたちは言い表すのだと言います。

これはのんきな話、他人事の話ではありません。むしろ、とても厳しい、激しい、わたしたちへの問いかけです。そのことに気づく時に、わたしたちの鈍さを思い知らされます。わたしたちキリスト者はいわゆるご利益信仰を批判します。軽んじます。けれど、わたしたち自身がどんなに誤ったご利益信仰のとりこになっているか。そのことに気づかざるを得ません。良いことが続けば感謝することができる。自分の生活の良いことでしか神さまに感謝することができない。いいえ、そこ

でしか神さまと繋がることができない。そこでしか神が父であられるということを見ることができないでいる。

だとすれば、自分がわざわいのさなかに立たされた時に、神に向かって、詩編の詩人が言い続けたように、「主よ、いつまでなのですか」「主よ、なぜ遠く離れて立ち 苦難の時に隠れておられるのか」という祈りをするでしょうか。それほどの信頼を込めてわたしたちが真実に祈ることがあるでしょうか。

今日のイザヤ書第 45 章 7 節に「光を造り、闇を創造し 平和をもたらし、災いを創造する者。わたしが主、これらのことをするものである」とあります。初めてこのみ言葉に出会ったとき、正直驚きました。矛盾しているではないか。そんなことがあり得るのか。そう思ったからです。だから、本当に驚くべきことです。そして、しかもこのイザヤ書は「あなたはわざわいをすらお造りになる方だ」と言って神を呪っているのではないのです。非難しているのではないのです。それに先立つ 4

節、5節にはとてもすばらしい信仰の言葉を語っています。こ

こは口語訳の方が分かりやすいので、そちらをお読みします。

「あなたがわたしを知らなくても、わたしはあなたに名を与えた」。「あなたがわたしを知らなくても、わたしはあなたを強くする」。あなたがわたしを父なる神として受け入れているか、わたしの全能を信じているか、それが条件にはならない。あなたがわたしを知らなくても、わたしはあなたを知っている。あなたがわたしを知らなくても、わたしはあなたを選んでいる、あなたを強くしている。そういうことでしょう。

ここで神が災いを創造するということは、言い換えると、災いをそのままにはおられないということです。不幸や悲惨をそのままにはおられないということです。それは、もう一つ言い換えると、神はその災いに苦しむ人々の中に立って、生きて働き続けてくださるということです。更にもう一つ言い換えると、神は将来に向かって、わたしたちと共に生き続け、働き続けてくださるということです。わたしたちが全

能の神を信じるということは、そのように神の将来を信じることです。わたしたちのすべてがこの神のみ手の内にあるということです。天地を造られた全能の神、その全能の父なる神は、いま全能の働きをしておられる。この神の思い、神の好意を、それに根ざした神の支配を、教会は<摂理>という新しい言葉をもって呼ぶようになりました。わたしたちが「われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず」という言葉で信仰を言い表しているのは、神が善き意思をもって、この天地のすべてを支配しておられる、そしてみこころを必ず実現して下さるという確信を語ります。祈ります。

教会のかしらである主イエス・キリストの父なる神さ

ま。いまなお続く世界の悲しみ、自分の傍らにあって、なおわたしたちがその苦しみを十分に見抜くことができない人のあることを思い、赦しを請う者であります。けれどそうしたわたしたちでありながらも、あなたが全能の父であられることを問うことがゆるされ、こころから感謝いたします。どうかわたした

ちの心を開いてください。あなたが全能の父であることを信じて、あなたが与えてください。この教会を、ここに集まる者を、ここに集まることができない者を、あなたの父としての慈しみのなかで励まし、慰め、立たせてください。感謝と願いを主イエス・キリストのみ名によって祈ります。

アーメン

讃美歌 讃美歌 21-14-3 (たたえよ、王なるわれらの神を)

献金 讃美歌 21-65-2

報告 週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と

聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>